

「ジェントルマン」とイギリス小説（その1）

井 出 弘 之

(1)

D・H・ロレンスの『虹』の第1章を開けてみよう。トム・ブラングウィンという男が出て来る。彼はもしなれるものなら母親の望む通り「聡明で紳士になれる様な人間に」になりたい青年なのである。兄のアルフレッドがだらしく生活しながらも「殆んど紳士に近い暮らしをしている」だけで女達にもてはやされるのに立腹する。彼は＜ジェントルマン＞に憧れる。或る遊覧地で一人の女と知合い、彼女を恋するのだが、丁度その時その女には連れの男がいて、その男が邪魔なので猿の様な顔つきだと蔑む一方、「終始おどろくほど素晴らしい紳士、貴族ぶりだった」という観察をする。後に判明するところによれば、女は苦勞人ではあるが「生れのよい淑女で地主の娘だった」とある。（中橋一夫訳による。）トムに羨望の念を起させた＜ジェントルマン＞とか或は＜レイディ＞とかは一体何であつたろうか。トムの頭の中で、そしてトムの創造者であるロレンスの頭の中で、漠然とはしていても何らかの＜ジェントルマン＞という言葉の概念規定（今その穿さくはしない）が行われていたことは確かだろう。

イギリスの小説に＜ジェントルマン＞という観念が現れるようになって久しい。久しいと言うよりはイギリス小説発生時から常に付纏っていたと言っても過言ではない。当今の通説に従ってサミュエル・リチャードソンが最初の芸術としての近代イギリス小説作家だと仮にしても、その三つの長篇小説はいずれも＜ジェントルマン小説＞だと考えられる。『パメラ』ではB氏の紳士性の真偽の検討が行われ、パメラの＜ジェントルウーマン＞ぶりが讃美される。『クラリッサ』ではラヴレスの紳士性とその仮面の背後にある暗い情熱が描かれ、『サー・チャールズ・グランディソン』ではサー・チャールズという＜ジェントルマン＞が理想的な人間像として描かれている。更に他の十八世紀の大小説家達として文学史上位置を与えられているフィールディング、スターン、スモレット、デフォー等の作品でも＜ジェントルマン＞という観念が少なからず結びついているものが多い。

私は様々な＜ジェントルマン小説＞、中でも『サー・チャールズ・グランディソン』の意味と評価を検討する準備として、ここで＜ジェントルマン＞という観念と、それが小説の、そしてイギリス小説の本質と如何なる関連を持っているかを考えてみたい。

(2)

O.E.D.に依れば＜ジェントルマン＞という語は古くから様々の異なるニュアンスを以

て用いられたらしい。歴史用語としては「貴族 (nobility) とは同じ身分ではないがどの身分に属するという正確な規定はなく、とにかく貴顕なる者で紋章を持つ資格のある者」という意味。更に「血筋が良くてもそれに相応しい資質と態度を備えた者、従って一般には騎士的な天性と繊細な感情を持つ者」という意味。更に加えて「社会で優位を占めるか、或は占めていることを示す様な生活の習慣を持っている者、しばしば実業に従事せずに安楽に暮せる資産を持つ者、有閑有産の士」。そして最後に「当人の社会的身分に関係なく "人" の丁寧語」。と以上の四種に大別されるようである。最後の意味を除いて、すべて社会的な地位・身分に関係していて、エリート意識を反映していると言える。そして二番目の意味ではそれに加えて個人の特性、品位、マナーが問題とされている。＜ジェントルマン＞という語が厄介なのは、この社会的な人間の評価と個人的な人間の価値づけとが入り混って錯綜していることが一つの原因をなしている。そのどちらも無視することは出来ない。

R. H. トーニーの論文「ジェントリーの勃興」は16世紀末から17世紀末にかけての社会層の変動を分析してイギリス革命に一つの解釈を与えたことは周知の通りであるが、ジェントリーの勃興と封建貴族の没落とがこの時期に同時に行われたことを例証する時、彼はそれに先だって＜ジェントリー＞に定義を与えることを忘れてはいない。まず、「イギリス・ジェントリーの地位は法的な差別に依って決っているのではなく、通念によって決っている」と言い、

「ジェントリーとは古くからの資産家のことにほかならない」という言葉に賛意を表しながら、こっそりと、まあそんなに古くなくてもよいさ、とつけ加えるのが普通の考え方であつた。トマス・スミス卿の言葉で言えば、ジェントルマンとはジェントルマンらしく金を使う人のことなのである。せっかちに定義しようとした理論家達にも、この賢明なトートロジー以上の定義に成功したものはほとんどなかった。と述べて、「しかしこういう曖昧さにもかかわらずこの社会層を見分けることは困難ではなかった」としてジェントリーの構成員の中核を定義づけるのである。

まずヨーマンよりは上で貴族よりは下の土地所有者と、これに加えて、かつての貧農のあとをついで、直営地の定期借地人となった富裕な借地農や、あるいはその一族の小作人たち、つぎに、有名な法律家や僧侶や、ときには医者などというような、やはり急激に増えつつあった専門職業の人々、そして富裕な商人たち、であった。商人たちは多く地主の子弟であったが、もしそうでなくとも、地主の子弟と同様の教育を受け、同じ社交界に出入し、フランスとは違ってイギリスでは、ふつう、社会的には地主と差別されなかったのである。このように、いろいろな層を含みながらまとまった平民階級上層部の、富と権力との急速な増大こそ、当時の人々につよい印象を与えたものであった。文学は彼らの勝利を讃え、洋行帰りの知識人は彼らの作法を洗練しようとし、彼らを教育するために書かれた手引書は彼らを美化する伝説をつくっ

てしまい、教育も、職業も、芸術も、とくに建築も、彼らの影響を受け、そして、この社会秩序の変動のうちに新しい国家の前ぶれを見ぬいた観察者さえあったのであった。（浜林正夫訳・未来社刊・1957に依る）

長く引用したのは、ジェントルマン階層が社会勢力を持ち歴史を動かし始めた時期に於ける＜ジェントルマン＞という語の概念規定をこれ程簡潔に行ったものはないからである。しかし今ここで我々が注目すべき点は、構成メンバーや社会的地位ではなくて、むしろ逆にジェントルマンという存在が「美化」され「伝説」を形造ったということと、どんなに概念規定を行ったところでそれは一つの「通念」に過ぎなかったという点であろう。

『オックスフォード諺辞典』をひいてみると、＜ジェントルマン＞に関する数多くの諺があるが、その中から目星いいものを拾うと、‘Jack would be a gentleman if he had money.’ ‘Jack would be a gentleman if he could speak French.’ ‘Manners and money make a gentleman.’ ‘The king can make a knight, but not a gentleman.’ 等がある。＜ジェントルマン＞とは金があればよいのか、フランス語が話せればよいのかマナーが優れておればよいのか、家柄がよくなければならぬのか、或はそのどれも兼ね備えなければならないのか。

成上り者達がプライドを持つために、「理想的人間像」を表象する＜ジェントルマン＞という一つのアイデアが創作され、ある者はそれを自分に強いようとし、又ある者はそれを他人に強いようにしたのである。＜ジェントルマン＞とは「理想のもの」であり「期待されるもの」であり「アイデア」である面を有している。それは17世紀初め頃の興隆期には「実感」として感じとることが出来たかも知れない。しかしそれは同時にそれは「期待されるもの」であり「フィクション」であったのだ。＜ジェントルマン＞という観念の取扱いの難しいもう一つの、そして最大の理由はここにある。

(3)

キングスレイ・エイミスが或る小説の中で、愛しているかどうかを決めるのはすももが好きかどうかをきめるのと同じ様に難しいことではない、と一人の登場人物に言わせている。自分がある人を愛しているか愛していないか、それは生活の中では容易に判断がつくものだ。その場合、我々は「愛」を「実感」としてとらえており「愛」が「フィクション」だなどとは及びもつかない。しかし当の生活の場から離れて「愛」について議論する時、「愛」を分析し説明しようとする時、我々はその「実感」からますます遠ざかり迷路に入りこんだ印象を覚えることがある。その時我々は「愛」が「実感」であることを忘れていたのだ。生活の場から、体験から離れた「愛」は「フィクション」であることを我々は認識しなくてはならない。

階級、或は地位の意識についても同様なことが言える。我々は多かれ少なかれスノッ

(その種類は問わないとして)であると思われるのだが、ここで私は全くスノビズムを捨て去って真剣に階級意識と対処したフランスの哲学者、シモーヌ・ヴェイユの言葉を想起せざるを得ない。ブルジョア階級出身の哲学教師ヴェイユは勇敢にも不況時代の工場に一女工として身を投じた時の感想を、次の様な言葉で力を込めて述べている。——「多くの面で私の期待していたとおりの経験ですが、それでもこれは一つの溝によって期待とはちがっています。これは現実であって、空想ではないのです。」(『シモーヌ・ヴェイユの生涯』・大木健著・勁草書房1964年刊、p.29) 彼女が労働者の生活を、それを経験せずに一人のブルジョアとして外から眺めていた時には、労働者生活を「空想」していただけ、「期待」していただけであって、それを生活の中中で味ってみると、その実感は今迄の期待とは「一つの溝」によって隔てられ、両者は全く異質のものであったというのである。

チャールズ・ディケンズは幼い時<ジェントルマン>になるべく教育を受けていた。ところが父親の不遇で突如として<ジェントルマン>の座から落ちる。それが『オリヴァー・トウィスト』にどのように反映しているかを述べて、ヒリス・ミラーはディケンズの告白に次の様な説明を付けている。——

それ迄は彼は、自分が大きくなったら学問のある貴頭になるだろうことを確信していた。既に彼は将来の自分の姿を期待ではあるがリアリティとして握んでいたのだ。ところが今や自分が過去の自分では文字通りなくなったのを実感している。それはあたかも彼の生命の实在性と確実性が、今迄の彼の实在そのものがすり抜けて行き、自分が非实在の深淵に落ち込んで行くかの如くである。...他の工場で労働する少年達の仲間に沈み込んだという感じ、自分のそれ迄のアイデンティティ(「私がそれ迄学んだこと、考えたこと、喜んだこと、私の空想力と競争心をかきたててくれたもの」)がすり抜けて行ってもう元通りにはならない感じがした。そして自分の今迄の境遇を思うと悲哀と屈辱の念が身体をつき抜けたと彼は言っている。彼は自分の存在そのものがすり抜けて行って、余計者という新しい自己と置換えられるように思ったのだ。彼のアイデンティティがすり抜けて行ったのは新しい境遇の所為というよりは両親によってそんな境遇に捨て去られたと感じたからだ。(ラインハート版『オリヴァー・トウィスト』のイントロダクションより)

ディケンズが全く異質の世界に投げ込まれた印象を持ったのをミラー氏が両親に捨て去られたからだと解釈しているのも一理あろう。或は又、それは『オリヴァー・トウィスト』の夢でしか決して融合することのない明暗二つの世界に象徴されているように当時の英国での貧富の隔りの大きさを説明されることも可能であろう。だがしかし、我々はここでディケンズが二つの世界の間に大きな一つの溝を感じた理由を穿さくすることより、むしろ溝があること自体に関心を払うべきではあるまいか。何故なら、『オリヴァー・トウィスト』を読む我々の心には、その溝自体が強烈なリアリティをもたらし、そのレゾン・デートルを我々に問いかけるからである。それは生活の場に於て体験することによる、「期待

」が偽りの「実感」をよび起すことの証明である。＜ジェントルマン＞を「フィクション」として把握することの重要性を、この例は示してくれているように思う。

我々はここで「フィクション」としての把握、観念の实在への疑惑が小説の本質と如何なる関係があるのかを考えねばならぬ段階に達したようだ。それでは小説の本質とは何だろうか。

(4)

小説とは一定の長さを備えた散文で書かれた虚構物語（フィクション）である。この定義は小説には社会的視野がなければならぬとか、芸術性がなければならぬとかいう要求以前のものである。虚構、これこそ小説論の根底にあるべきである。私は中村真一郎氏が「フィクションとは何か」について述べている次の一文を想い出すのだ。――

「市民」というもの、普通の人間というもの、あるいは実業に従事する人間というものは、実は実感以上の範囲を生活圏としている。ということは、現実を一つのフィクションとして把握している、という意味である。それは、一応、常識というものによって捉えられているのだが、その常識の背後にあるものは、政治、経済、法律などの作り出した客観的な約束だろう。つまり手近な例で言えば、小切手という紙片を、金だとお互いに考えて、授受するような、「仮構」――無数のそうした仮構の総合として、現実を理解している。実感の及ばない遠いところを、「フィクション」によって把えることにより市民は生活を成り立たせている。（『文学の擁護』，河出書房新社・昭37）

中村氏は「フィクション 仮構」として広い現実を把えるという習慣と「市民的な生活感覚」がフィクション作家には必要であるという持説を述べ、「現実に対して働く構想力と創作の中の架空の世界を支配する構想力とは、平行的な関係にあり、そして、同質のものだ」と主張するのである。

中村氏の言う通り、ますます高度化されてゆく文明社会にあっては、実感として現実を把握する機会が、非常に狭められていることは疑えまい。形式、様式が、極度にソフィスティケートされて現実と離反する。そして形式を現実だと、誤って直感する、誤って認識するという現象が生じて来る。サイラス・マーナーが床下に貯えた金貨を手で撫でてその触覚を楽しんでいるシーンはこれを象徴しているように思われる。

所謂ノン・フィクションはアクチュアリティを重んずる。ノン・フィクションは、「フィクション」という形式を用いないで「実感」を伝達するのであるが、「フィクション」という形式を用いないということは、「フィクション」として現実を把握しない、ということとは異なる。『カナダ・エスキモー』（朝日新聞社・昭38刊）の著者はセイウチの生肉を喰り喰うエスキモーの現実世界を、出来る限り文明社会での偏見・先入主を払い落して実感として把握しようと努力する。文明社会という余りに複雑な仮構の世界に住んでいた

新聞記者は、その試みに挫折する。しかしある現実を実感として把握せんとする、徒勞には終るが、彼の勇敢で真剣な態度は、文明がフィクションであることを、いや文明を一つの仮構として、生々しく読者に認識させる。すぐれたノン・フィクションには、異常な現実を実感として認識する姿勢の裏に、日常的な現実を「フィクション」として認識せんとする姿勢がなければならない。

このノン・フィクションとは逆にアクチュアリティを重んじないのがフィクションである。そしてフィクションにはノン・フィクションから一番遠い地点に「御伽噺」があり、ノン・フィクションに近づくにつれて順に、「童話」「民話」「ロマンス」がある。フィクションとはアクチュアリティの拘束、約束、束縛をのがれるということなのだから、順にアクチュアリティが増して来ている。すぐれたフィクションはその虚構の世界が、現実を仮構として把握する力によって裏うちされているものである。すぐれた「御伽噺」がしばしばフロイドの心理学によって完全に日常生活の場に於ける実感に還元し得る現象はこのことを端的に示している。

近代英国小説はフィクションというジャンルをノン・フィクションにならぬ瀬戸際迄アクチュアリティを附加した文学形式と言えよう。

元来言葉というのは形式であつて、その指し示す現実とは離れている。ヴァレリーの表現を借りると、それは「ちょうど、兌換紙幣や小切手が仮りのものであるというように、本質的に仮りのもの」であり、「我々が兌換紙幣の価値と称するものは、その正体、概して薄汚い紙きれであるその正体を忘れることを必要とするもの」である。（「詩と抽象的思考」佐藤正彰訳による）＜ジェントルマン＞という言葉は、実感として「見分けることが困難でない面」と、理想のもの、或は期待さるべきものである面との、双方を持っているのであるから、この両面を認識することを常に怠ってはならない。更にこれを小説の大きな主題とする場合は、当然、作者が現実の「実感」をどの位真剣に受けとめているか、作家がどの程度に迄「フィクション」として現実を把握しているか、つまり作家がアクチュアリティの要求する日常性の呪縛を、言いかえると「通念」の信仰をどの位抜け出ているかということが批判されて然るべきだと思われる。

(5)

ここでイギリス小説の中から＜ジェントルマン小説＞の例を二、三眺めてみよう。

まず20世紀の中ばには『銭があれば紳士』(*Jack Would Be a Gentleman*, by Gillian Freeman, 1959 (1962, Penguin Book)) という小説がある。先にあげた＜ジェントルマン＞に関する諺のうち‘Jack would be a gentleman if he had money.’からタイトルを採ったことがエピグラフに明らかである。ジャックというペンキ屋の一小市民に大金がころがり込んでその家庭生活がどうなったかというのが物語である。隣の家ではテレビの新型が入っているのに古びたので我慢している。それをお上さんにせつかれている亭主のジ

ジャック。御本人はフットボールのかけを楽しんでいるうちに5百万ポンドの大金があたる。生活が一変する。高級住宅地のデラックスな邸宅を買い込み、今迄のぼろ家は人に貸し、雇人まで使う生活が始まる。上さんは喜々としているが、亭主はペンキ屋をやめて商売を始め成上りのジェントルマンとなったのだが、どうしても新しいクラッシーな生活になじめない。その内に商売で使っていた者が店の金を盗み出す。買い与えた夢の様な競争車で息子がレース中に事故死する。それを新型のテレビで母親が目撃するというアイロニカルなシーン。亭主はこんな大きな家は嫌で昔の家に帰りたい、そうすれば行儀の悪さを妻にたしなめられることもあるまい、商売は止して店を売ろうと思う。というところで物語は終る。リチャードソンの小説の＜ジェントルマン＞とこの小説の＜ジェントルマン＞とを較べてみると、＜ジェントルマン＞は死に絶えたことが感じられる。前者に強く要求された様々の徳性は後者では姿を見せていない。父親は＜ジェントルマン＞であることには大した執着は持っていないし、息子は自動車の新型が欲しいだけだ。それを母親は「野心」(ambition)がないといってとがめるのである。母親は自分の為に、そして子供達の為に、ファッショナブルな生活に絶対の執着をもっている。娘は出来るだけよい結婚をするために＜ジェントルマン＞にあこがれている。この小説の場合＜ジェントルマン＞とは完全に経済的なエリートを意味している。著者はそういうプロレタリアの意識を冷酷に観察している。

だが、一世紀遡って19世紀の中ばには、『紳士ジョン・ハリファックス』(John Halifax, Gentleman, by Mrs. Craik, 1856 (1902, Routledge)) が＜ジェントルマン小説＞としてベスト・セラーとなっている。孤児から＜ジェントルマン＞の地位を自らの努力で築きあげて家を治め、町を治めて死ぬ迄のジョンの一生が描かれている。背景は19世紀初頭に置かれている。「上層階級と下層階級との間には大きな隔りが厳として存在していて、富める者は貧しき者を搾取し虐げ、貧しき者は富める者を憎悪しながらも詭道を譲っていた」頃、そして「キリスト教はその貧富の隔りを勇敢にまたいで、より卑しければ普通の人であり、より気高く賢明であれば紳士だということを説明する力がなかった」(Ch.7) 時代に、ジョンが高潔な志を持つヒーローとして主人を支え、病人をかばい、隣人を助けて懸命に働き、遂に人々から＜ジェントルマン＞と認められるに至る。「義務」を重んずる社会的な相対的な倫理と「高潔」を信条とする個人的な絶対的な倫理とがキリスト教思想の中に融合されて、ジョンはそれを体現した理想的人間像とされている。ジョンは主人からお前はなめし皮屋ではないか、手職人ではないか、そんなお前が近隣の墮落したジェントリーと附合うとは自分が紳士だとでも思っているのか。と問われると、「私は自分がジェントルマンであることを期待しています。」と答えるのだ。

ところが、もしこういう場面に遭遇しても、こう答えなかったであろう＜ジェントルマン＞がこれより更に250年ばかり前にいる。『ニューベリーのジャック』(Jack of Newbury by Thomas Deloney, 1597)の主人公が彼である。彼は勤儉に努めた甲斐あって今は富

裕な織物屋であるが、ある時女王に謁見をする。女王が「紳士よ、立ちなさい」と呼びかけるのにジャックは「紳士では私はございませんし、紳士の倅でもございません。唯の貧しき織物屋でございます。」と答える。女王はこの返事が非常に気に入って曰く、「仕事は織物屋であっても境遇は紳士、心は忠実な臣下ですね。」(Ch.2) そしてこの小説はジャックを理想的人間像とした＜ジェントルマン小説＞なのである。

(6)

上の例から我々は＜ジェントルマン小説＞に元来課せられていた使命、すなわち、＜ジェントルマン＞という期待さるべき人間像を示して読者に社会の中で個人が「如何に生きべきか」を教育するという使命を再確認するのである。だがそれは現代に於ては消滅しているのだ。それはどうしてだろうか。そしてそれはいつ頃消滅したのだろうか。リチャードソンの『パメラ』はその成立の前提に各種の「道徳規範書」が必要であったし、彼自身「道徳規範書」たる『書簡文範』を著している。『書簡文範』はその各々のシチュエーションを虚構することが必要だから、その虚構の必然性が歴たる「規範書」をフィクションである「近代小説」に高めたのだという一応の臆測は成り立つ。この「規範書」はジェントリーの為のものであったろうが、それではそれはカスティリオーネの『宮廷人の書』(*The Book of the Courtier*) だとか、ネンナの『貴族性論』(*A Treatise of Nobility*) と本質的にどう違っていたのか。そして市民社会成立前の＜ジェントルマン小説＞と市民社会成立後の＜ジェントルマン小説＞との間には質的にどんな違いがあるのだろうか。

(7)

ともあれ近代小説はイアン・ワットの細かな分析によって明らかにされたように、ロマンスから脱皮する際にアクチュアリティを重んじた。アクトは、丁度人間が一度しか生きられないように、一回きりの出来事である。一個人の歴史は理想的な人間像によって作られているのではなくて、過去の間像、一回きりで二度とは繰返せない人間像で出来上っている。だがそれは、現在の自己を如何なる型の＜フィクション＞でアイデンティファイするかによって現在の自己の解釈を書き換え得るという可能性によって、一回きりの人間像ではなくなってくる。そして現時点に於けるセルフ・アイデンティフィケーションに用いられる＜フィクション＞の型こそが、未来の期待し得る人間像を決定するのである。

我々読者がフィクション（虚構物語）から目を離して「ふと我に帰る」時、そこにあるのは＜フィクション＞でない現実の生活の場である。そこに於て現在の自己は期待される自己を＜フィクション＞でない自己に改変することを迫られて、前にのめるか、後込みするか、或は確固たる姿勢をとるかしている。人は、現実の＜フィクション＞としての認

識から出発して＜フィクション＞でない現実の場に戻る，日常性の脱皮から出発して日常性の世界に戻る，通念を一度覆して又通念の世界に戻る。そしてそれから期待されうる＜フィクション＞すなわち，未来へと飛出してゆくのである。＜ジェントルマン小説＞の意味と限界はそこに自ら暗示されている。 （未完）

（1964年10月）